



ひらほく新聞

ひらほく新聞で検索!

★ホームページ・ひらほくランド★

http://www.hirahoku.com/

☆バックナンバー含め ひらほく新聞を
閲覧・ダウンロード可能です!

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



中野敏治 <なかのとしはる>
神奈川県公立中学校現役校長。教え子からクラス会に呼ばれると、どんな予定よりも優先して100%参加する熱い先生。イマドキの子、やんちゃな生徒とも正面からぶつかり、通称「中野マジック」と呼ばれる指導法で学習や生活のやる気スイッチを入れる。学校活動以外に、トイレ掃除のボランティア「かながわ便教会」、清掃活動などの「中学校区を美しくする会」の代表も。文学活動では、1986年より続く、やまびこ会(全国教育交流会)の代表として季刊誌等で全国の教育関係者と情報交換。本書のもとになった個人通信「かけはし」を毎月発行。

2012年6月、ロケット開発の植松努氏講演会にスタッフとして参加、主催をされた中野敏治先生とはそれ以来の縁ですが、この度、中野先生が「学校で生まれた」ココロの架け橋(こま書房新社)という書籍を出版されました。教育現場で出会った感動悲話の数々。アマゾン「生徒指導」ランキングでも一時トップに。子どものココロをつかむ「中野マジック」満載。これ以上の悲劇をなくすため、一人でも多くの教育関係者やご家庭へ届けたい、最幸の一冊です。

中野先生の紹介分より

三十年以上の教員生活の中で、子どもたちが私に教えてくれた感動ストーリーです。すべての子どもには輝きがあります。その輝きに大人が気づくことができたとき、子どもたちは、輝きを増し、成長していきます。

この本に載っている四十以上のストーリーは、きつとあなたの心の奥にまで届き、子どもたちを見る見方を変えていきます。子どもたちは、大人たちが想像もしないことをさりげなく、さらっとするものです。その姿に大人の心は感動で震えるものです。



1,380円+税

分かりやすく心温まる実話に感動の涙溢れる、教え、学び満載の一冊です。以下、感動悲話より二編をどうぞ。

『これって』

いじめじゃないの?』

事件は、男子更衣室で起きました。ある生徒が更衣室にかばんを置いていたら、そのかばんの一部が切られたのです。かばんは修理をすれば直ります。でも、生徒の心は治ることはありません。

誰が切ったのかはわからぬままクラスの生徒と話をしました。生徒たちとの話し合いは、誰がやったのかと言う犯人捜しになっていきました。

「私が更衣室に入ったときには気がつかなかった」「じゃ、その後じゃないの」「他のクラスかもしれない」「でも、その時間帯は私たちのクラスしか使わないよ」と生徒たちはかばんが切られたと思われる時間帯を絞っていきました。

そんな話の中で、かばんを切られた生徒は、下を向いたままでした。彼は、以前にも持ち物にいたずらをされたことがありました。

生徒たちの犯人捜しの発言が続く中、ある生徒が「先生!

これっていじめじゃないの?」と発言をしたのです。クラスがざわつきました。

いじめについて、私は生徒たちと今までも何度も話し合ってきました。でも、その話し合いは、資料などを使っての話し合いで、実際に自分たちがかわった話ではなかったのです。

「このクラスでいじめがあったの?」という小さい声も聞こえてきました。生徒は、すでにいじめという意識で話を始めました。

「なんでこんなことするの」「自分がやられたら、どんな気持ちなの」「何かあるなら、言葉で言えよ」と、様々な思いを話しました。

生徒たちは、思い思いのことを口にしたが、しばらくするとクラスは静かになりました。生徒たちの話し合いでは解決ができません。

しばらくの沈黙の後、普段あまり目立たない女子生徒が手を挙げたのです。そして、立ち上がって小さな声で「私は小学校の頃、いじめにあっていた。辛かったです」と話し始めたのです。

みんなびびりしました。今までいじめについて考えた授業でも、何も意見を言わなかった彼女が、自分の辛い過去を話し始めたのです。

「小学校のとき、仲が良かった友だちから...。私だけがそう思っていたのかもしれないけど、でも私は親友だと思っていたの。その子が急に私を無視してきて、その子だけでなく他の友だちも私を無視し始めたの。無視される原

因が分からなかったよ。辛かったよ。普段から、先生も親も、『何かあったらいつでも何でも話してね』って言うけど、言えないよ。だって、親に心配かけられないもの。誰にも言えなかった。辛かったよ。いじめはダメだよ。いじめのあるクラス、イヤだよ。私、この学校へ転校してきて、毎日楽しいんだから。いじめなんかしないよ。お願いだから」と、泣きながら、みんなに話したのです。彼女の話を聞きながら、何人もの生徒が泣いていました。

彼女の涙の訴え以来、クラスが変わりました。いじめや嫌がらせ、悪ふざけがクラスからなくなっただけではありませんでした。クラスが今まで以上に明るくなっていったのです。そして、クラスメイトのために、進んでいろいろな仕事をし合うようになってきたのです。彼女の心から出た言葉は、クラスメイトの心を変えたのです。

一人の勇気が、子どもたちの未来を変える。言葉一つで、意識は大きく変わる。

『俺がお年玉をあげる立場になるから』

二十四歳になる青年が来春、大学院を卒業し社会人になります。彼の妹は、四年制の大学を来春卒業し、兄と同じ社会人になります。

父親は、彼が大学に入学したとき、自分の部屋に彼を呼び一つの封筒を渡しました。その中には一万円札が数枚。父親はひと言「必要になった

らこれを使いなさい」と彼に伝えた。妹にも大学入学時に、同じように一万円札を数枚入れて、父親は渡しました。

二人は、大学へ行くために家から離れたところでそれぞれが生活を始めた。あるとき、妹がお金が必要になって、父親からもらった封筒を開けようとして、兄に相談をしました。

しかし、兄は妹に、「そのお金は、卒業するまで使ったらダメ。普通のお金じゃないんだ。親父の『しっかり学生生活を送れよ』っていう思いがあるお金なんだ。それを使っちゃうと、何かが途切れる感じがするんだ。だから卒業するまでは使ったらダメだよ」と言いました。

妹は、兄の言葉に何かを感じ、彼は大学に入学してから、毎年親にプレゼントをしていました。妹が大学に入学した時から二人で相談をし、プレゼントを送っていました。

一人暮らしで、食費もかかるはずなのに、彼は二つのアルバイトをかけ持ちして、お金を貯めては、毎年自宅にいる親のところにプレゼントを送っていたのです。

職場で使えるようにと卓上扇風機を。肩が凝っているのはと低周波治療器を。乾燥する頃には「職場で使って」とメッセージ入りでポータブルの加湿器を送ってきたのです。

今年の秋、彼が自宅に帰って来たときに、父親にお年玉のことを話し出したのです。「俺、小学校の頃からのお年玉の袋を取ってあるんだ。これ、大学を卒業する時、全部返すね」といきなり話し出したのです。

父親は、いきなり何の話をするのかと驚いていると、彼は「来年の四月からは、俺がお年玉をあげる立場になるから」と笑いながら言うのです。

父親は言葉が失いました。そして目に溜まった涙が分らないようにそっとその場から離れました。この兄妹は高校合格の時、親に言われました。

『合格おめでとう』と言いたいけど、そうじゃないよね。『高校に行かせていただき、ありがとう』というのが本当かもね』

妹は、友だちが家族で高校合格のお祝いをしているというのを聞きながらも、高校合格の日、家族の夕飯を作り、家族みんなに「ありがとう」と言っていたのです。そしてその夕飯は、家族の思いがこめられた料理になりました。妹が作った料理を囲み、中学時代のことを、そして高校でどんな生活をしたのか。親の高校時代の話もしたのです。時間が過ぎるのも忘れ、家族だんらの時間になったのです。

来春、社会人になる二人です。様々なことを学び、親への感謝を感じながら、社会人の一員になります。誰に対しても、感謝ということを大切に、そして、人の思いを感じながら成長してほしいと思います。

親は子の教科書。意識せずとも、その心は受け継がれる。

すべての子どもたちに光が必ずあふる。「人の輝きを見つめる」ことを貫き通す。強さ、優しさを持って信じ続ける。一つでも輝きを見つけて、気づいてあげ、認めてあげ、ただで人は強くなれる、成長できる。ココロの架け橋を生み出し、子どもたちの無限の可能性を引き出す「中野マジック」最幸です!